

# 分析化学と学会のすすめ



金子 聡

日本分析化学会の皆様、2020年度の中中部支部支部長を仰せつかりました三重大学大学院工学研究科の金子です。中部支部は2018年度で創立60周年を迎えましたので、今年62年目になります。私は、1992年に分析化学会に入会しているため、中部支部には28年間お世話になっており、育てて頂きました。中部支部では、本年9月に日本分析化学会第69年会を名古屋工業大学で開催する予定ですので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

私が初めて研究発表を行ったのは、第53回分析化学討論会でした。発表が終わってから、企業の方からさらなる質問があり、学会という場所は、大学関係者だけでなく、いろいろな立場の方が交流する所だと痛感しました。この時口頭発表した内容を Elsevier 出版社の *Analytica Chimica Acta* 誌に投稿し、Original Paper として掲載されましたが、それより前に共著で *Analytical Sciences* 誌に学术论文が掲載されていたので、Author として私が初めて掲載された学術雑誌は、*Analytical Sciences* 誌ということになります。

当時はまだインターネットが普及する前であったため、投稿原稿を4、5部印刷して、郵送で投稿していました。学術雑誌に投稿すると、レフリーによっては原稿の英文を赤で添削してくれることも珍しくありませんでした。少し前から、インターネットが格段に進歩したのでオンライン投稿が一般的になり、レフリーにより英文を添削される機会も少なくなったと思います。さらに、ネットが進化したため、剽窃<sup>ひょうせつ</sup>検知ソフトも充実してきており、Similarity Index も気にしなけりばならなくなりました。剽窃はいけないことですが、過去の自分の英文との類似性も気にしなけりばならず、郵送で投稿していた頃とは状況がかなり違ってきたと思います。また、紙媒体の出版がなくなり、インターネットだけの出版になると、学术论文発表の中身も、論文の本文だけでなく、Supporting information (SI) も付加して、発表できるようになってきました。したがって、重要度が少し低いグラフやテーブルも、すべて SI に報告することができるため、研究結果をより理解しやすくなったと思います。

近年は、インパクトファクターや CiteScore, h-Index など、色々な数字情報を気にしながら、学术论文を投稿しなけりばならなくなつたと思います。研究者の性<sup>さが</sup>なのか、学术论文や分析化学のことを考えていますと、論文の投稿や学会活動をしなけりばいけないと、何となく思えてきます。幸いにして、最近、分析化学誌(2019年7号)と *Analytical Sciences* 誌(2020年1号)に論文を発表することができました。両雑誌への論文掲載がかなり前になりつつある皆さま、久しぶりに論文の投稿を考えてみませんか。また、年会や各支部のセミナーなどに少し足が遠のいている皆さま、(日々のストレスを忘れて)分析化学に関して議論を深めてみませんか。きっと、楽しいことが待っているとあります。

[Satoshi KANECO, 三重大学大学院工学研究科, 日本分析化学会中部支部支部長]